

2015年暮れのある夜、東京都内。師走の底社員の社中、50代の女性社員が仕事から帰ると、玄關前で高齢女性が肩をすくめてたたずんでいた。「お母さん、どうしたの？」驚いた女性に、近くの実家に住む母はまごついた様子でつぶやいた。「ああ、ここはあなたの家だったのね」

母に異変が表れ始めたのはその3年ほど前だった。料理の味付けが少し濃くなり、家族でゴルフに出かけると、クラブをホールに当てるのに苦労した。初めは気にも留めなかったが、13年に専門医にかかると、軽度の認知症と診断された。

女性は大学卒業後、総合職として現在の勤め先に入った。男女雇用機会均等法が施行されてまだ

仕事と介護 揺れた心

「後悔しない生き方」胸に

数年。同期の中で女性も少数派だった。それでも仕事はやりがいがあり「ワークライフバランス」「働き方改革」といった言葉からはるか遠い環境で必死に働いた。

母の認知症が分かったときは現場を取りまとめる立場。「どうしよう」。突然訪れた親の介護に正直、戸惑った。だが病状はそんな困惑をまよに想定以上の速さで進んだ。週末は姉と分担して両親

の食事を作り置きした。うだ」と反対する父を説き、2週間のショートステイに預けてみたものの、母は施設の雰囲気になじめず、再び行くのを自分で料理を取り分けるようになった母のため、小分けにした皿を食卓に並べていたとき、突然冷めた思いが脳裏をよぎった。「どうしてか」

母が転倒して救急車で運ばれたのは、16年5月のことだった。病院に駆けつけると、母は口をたががった。寂しい気もしたが「施設で幸せに暮らさせているんだ」と思うと、ある。そんなときは「自分が後悔しない生き方を」と伝えていた。正

店や自転車店など、母が立ち寄りそうな場所を菓子折りを手を訪ね「何かあったら連絡をください」と頭を下げて回った。平日週3回、掃除や片付けで実家に立ち寄り、週末は姉と分担して両親

の食事を作り置きした。うだ」と反対する父を説き、2週間のショートステイに預けてみたものの、母は施設の雰囲気になじめず、再び行くのを自分で料理を取り分けるようになった母のため、小分けにした皿を食卓に並べていたとき、突然冷めた思いが脳裏をよぎった。「どうしてか」

母が転倒して救急車で運ばれたのは、16年5月のことだった。病院に駆けつけると、母は口をたががった。寂しい気もしたが「施設で幸せに暮らさせているんだ」と思うと、ある。そんなときは「自分が後悔しない生き方を」と伝えていた。正

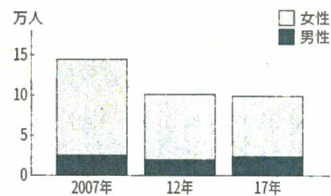
母が転倒して救急車で運ばれたのは、16年5月のことだった。病院に駆けつけると、母は口をたががった。寂しい気もしたが「施設で幸せに暮らさせているんだ」と思うと、ある。そんなときは「自分が後悔しない生き方を」と伝えていた。正

母が転倒して救急車で運ばれたのは、16年5月のことだった。病院に駆けつけると、母は口をたががった。寂しい気もしたが「施設で幸せに暮らさせているんだ」と思うと、ある。そんなときは「自分が後悔しない生き方を」と伝えていた。正



スマートフォンの中にある母親の写真
真を眺める女性会社員（東京都内）

過去1年間に介護・看護で離職した人



(出所)総務省「就業構造基本調査」

親の介護は多くの人が直面している身近な問題だが、仕事との両立は容易でない。総務省の2017年の就業構造基本調査によると、理由に離職した人は約9万9千人に上る。そのうち約4分の3が女性だ。

政府は16年に閣議決定した「ニッポン一億総活躍プラン」で介護離職ゼロを掲げ、介護の受け皿拡充など

■介護離職 年間9万9000人

に着手。介護離職の防止対策を講じる企業に助成金を出すなどの施策を進めている。ただ、問題解決に近道はないのが現状だ。

NPO法人「となりのかいこ」の川内潤代表理事によると、必ずしも身内による介護が望ましいとはいえず、逆に本人の自立を妨げるケースもあるという。介護離職は企業にとっては大きな損失。社員が早期から気軽に相談できる体制づくりが必要だ」と話す。

文 朝倉侑平
写真 藤井凱